フクシマ連帯キャラバン報告書

全港湾ひたち支部　大木　遼

フクシマ連隊キャラバンに参加して、東日本大震災と原発事故について改めて深く考える機会になりました。震災から 15 年が経ち、ニュースや教科書で学ぶ出来事になりつつあるが、実際に福島を訪れて話を聞いたことで、決して過去の出来事ではないと強く感じました。

私は 15 年前、小学生で当時、茨城に住んでいた私の地域でも大きな揺れがあり、停電や余震が続いたことを今でも覚えています。食料や水を買うために長い列ができていていつもと違う不安な空気が町に広がっていました。しかし、当時の私はまだ子どもで、福島で何が起きているのかを本当の意味で理解していたわけではいませんでした。今回キャラバンに参加して、被災地の人たちがどのような思いで震災や原発事故と向き合ってきたのかを知り、改めて考えさせれました。

特に印象に残ったのは、東日本大震災・原子力災害伝承館で見た展示です。被災された人たちの写真を見たとき、胸にぐっとくるものがありました。写真に写る人たちの表情からは、言葉では表しきれないほどの悲しみや苦しみ、そしてそれでも前を向いて生きていこうとする強さが伝わってきました。ただ資料として見るのではなく、一人ひとりの人生がそこにあるのだと感じ、自然と足が止まりました。

また、震災や原発事故によって、住み慣れた土地を離れなければならなかった人たちがいること、今もなお完全に元通りとは言えない状況が続いていることも知って茨城も被災地ではあるが、福島の人たちが背負ってきたものの大きさを思うと、震災の影響の広がりや深さを改めて実感した。

今回のキャラバンを通して、震災の記憶や教訓を風化させてはいけないと強く感じ 15 年前、小学生だった私たちは当事者としての記憶を持つ最後の世代の一つでもあると思う。だからこそ、自分が見たことや感じたことを周りの人に伝え、これからの防災や地域のあり方について考え続けていくことが大切だと思いました。

この経験を通して、被災地のことを自分ごととして考え続ける姿勢を持ち続けたいと思いました。